
ピーク6109mの試登

井 口 邦 利

偵 察

すがすがしいベースキャンプの朝を迎えた。

わずか一日半で来てしまったベースキャンプ、来た方を振り返るとチャンバの山が青く霞んでいる。

氷河盆地が曲りくねった谷の奥にポツンと浮雲のように見える。

今日の天気は上々だ。私はシェルパの一人をつれて散歩がてらに偵察をしてこようと谷の上の方へ行くことにした。

ベースキャンプのすぐ北側に支尾根が下りて来ているが、その尾根上のコルへ上がれば我々の行く谷は見下せそうであった。しかしヒマラヤのスケールには慣れていない我々だがずい分時間がかかりそうに感じた。シェルパも時間がかかるから今日は谷沿いに行こうということで話しは決まった。それに散歩だからあまりよくばることもなかりうと……。

今日は休養と決っていたが残った者は食料、装備の整理を少しでもやっておこうということになった。

荷はセーター一枚だけだから足はすこぶる快調である。キャンプからは小さな石がごろごろしていると見えた谷も実は家程もある巨岩の堆積であった。波打つこの岩の堆積を越え平坦な河原へ出た。春なら高山植物のきれいなメドーのようなところだ。

人工的な石の並びが見える。1958年の英国隊のベースキャンプの跡であろう。以後の荷上げはここまでが約一時間一ピッチの所である。

二人はここから二段目のモレーンの丘へ上った。急に頭上に白い麗峰ガングスタンのまばゆい陽光が目に飛び込んできた。

北面の懸垂氷河が実にみごとだ。

谷が行きつまったところで氷河は南北に**ほとどん**直線に広がっている。正面には小さな氷河がいくつも山腹へ上っている。

北側氷河のモレーンへ上ると英国隊がとったと思われる氷河のトラバースルートが見える。岩の上に腰掛けてスケッチをする。その間にシェルパは北側氷河の奥まで行

けば目指す山が見つかるかも知れない、と言って出かけて行った。

6109m 峰が見えた

頂度スケッチが終るころもどって来て「氷河の奥に大きな山がある。」と言って来た。シェルパの話聞きながら頭の中に地形と山の姿を描いて見る。

岩くずの乗った氷河をたどって行くと氷河が右へ90度曲った奥にアイスフォールをへだててピラミダルな山が見えた。

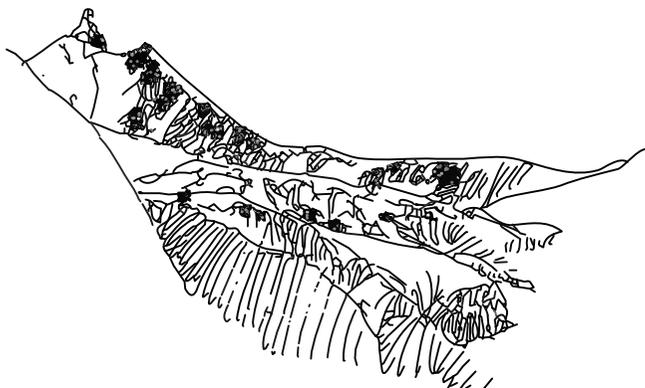
以外と小さかった。しかし6000メートル以上はありそうである。半信半疑ながら目標の山ではないか、と思った。方角と位置が考えていたものと大体一致していたからである。足もとに茶色いモレーンばかり見なれた目に純白の氷河とコバルトブルーの空の青さが僕の「ヒマラヤへ来た」という感情を満足させてくれた。

散歩以上の目的を達してこの日はベースキャンプへもどった。

翌日、増子とシェルパのダルマチャンドゥとで前日のルートを、那須、シェルパのワンギャルと井口とでもう一つのルートと考えられる上部氷河へ上っているアイスフォールを通過して前日に見たピークへアプローチできるかどうか確認することになった。北側氷河の末端のモレーンで増子のパーティーと別れ、三人はモレーンを河原へ下り対岸のサイドモレーンの上をたどってアイスフォール中段のプラトーへ出た。

ワンギャルと私とでさらに氷河を横断して対岸の山腹を上って、目的の無名峰の見えるところまで行くことにした。生まれて初めて氷河らしい所を歩くと少しばかり緊張する。ワンギャルはザイル不用という。なんだかクレバスが不気味にいらんでいるように見えてしよがなかった。

ワンギャルは川を飛石づたいに歩くようにピョンピョンと先を行ってしまう。こちらはおっかなびっくりクレバスの横をすり抜ける。対岸に出たときは正直ほっとし



た。しかし対岸の急斜面の登りは、まだ高度に慣れていないので息切れが激しくて高度がかせげず、目的の山が望めそうなところまではとても着きそうにない。やむなく下山とする。4850メートルであった。ベースキャンプから900メートル上ったことになる。増子のパーティもまだ体調回復せず前日の地点まで行く前に帰って来た。

ベースキャンプでこれからの予定を話し合い北側氷河へ入る最初のルートをとって氷河奥に仮キャンプ1を作り、上部を偵察することにし、16日リエゾンオフィサーだけを残して全員六名で荷上げをし、那須、ダルマチャンドゥ、井口の三名がキャンプ入りした。このキャンプはこれから攻撃しようとする無名峰6109メートル峰とそのルート、ベースキャンプから登って来るルートは大きな岩の上に来ればすぐ見下ろせる絶好の場所であった。ただベースとのキャンプ間が荷上げの時丸一日がかりになってしまうという距離が唯一の欠点であった。

キャンプから見るアイスフォールは回避できそうに見えたが一応ルート工作用にフィックスロープ一卷200メートルと登攀具を持ってキャンプを出た。

氷河は二段になっていて左のアイスフォールと山腹のコンタクトラインを上ることによって下部は逃げられそうだったが、上部はよく見えない。

三人はガレ場を上って中間の雪田に出、さらに氷河を右と左に分けている中央のインゼル上に出ることによって上部アイスフォールを回避できることが判った。

インゼルの上に那須を残して私はダルマチャンドゥと二人でさらにキャンプ2の建設予定地を探しに前進した。インゼルの上はほとんど平らで小さな氷河のうねりの丘とクレバスが走っているくらいであった。しかし歩くとなると話しは別でずいぶんしんどかった。いままで山の南面ばかりに接してきた目に北側の山腹はまばゆく映り、山も一段と立派に見える。

氷河のプラトーを横断した対岸の尾根の直下から見る6109メートル峰は頭上におおいかぶさってくるようであった。南西のコルへ突上げているクーロアールも急だがなんとか登れそうに見えた。

我々は登攀具をここにデポして那須の特っているインゼルへ急いだ。

荷上げ開始

C1はこれで本格的なキャンプとして充実させなければならない。明日からは全員で荷上げをしなければならない。一気にベースへ下る途中、荷上げをして来る大嶽と増子に逢い、二人の荷をC1まで上げて一緒に下った。夕方から吹雪となり、全身雪だらけでベースへ帰着した。

我々はこの無名峰を決定した時、写真もスケッチもなく、日本で調べ上げてやっこの思いで作り上げたこの付近の地図が唯一つの資料であった。それもティロット谷の周辺は、極く大ざっぱな概念図でしかなかったし、そんな大ざっぱな地図からルートも何も知ろうとする事が無理な話であった。それには唯、高度から割り出した各キャンプの高度と、多くの山がそうである様に、アイス・フォールの突破と氷河から稜線までのルート開拓が鍵となると考えていた。我々のこの考えはやはり現実となった。そしてアイスフォールはその下部をアイスフォールと側壁とのコンタクトラインを抜け上部は氷河を横断し、アイスフォールが一ヶ所のみ弱さを暴露している急な雪壁状のところにルートが聞かれた。一方、氷河から稜線へのルートは、稜線上のコルから氷河に落ちているクーロアール状の雪と岩のミックした壁が、急ではあるが抜けられそうであった。この約300mにフィックスを行えば、コルへ作ろうとしているC3への荷上げも可能になるだろう。C3から頂上までの幅広い稜線はスタカットで登れば良い。これでルートも各キャンプの位置も決定した。

翌18日はこれからの本格的な登山活動に備え、休養とした。岩の上でトカゲをしたり、シェルルパたちとインド式トランプに興じる者、何日出せるとも判らない手紙を書いたり、それぞれおもい思いの時を過した。

19日は夜半から雪が降っていた。朝、起るととても同じ場所とは思えない純白の世界であった。BCの天幕は夏天にフライシートをつけてあるだけなので、雪の為に天幕がつぶれそうになる。メステントもまわりに岩を積み上げ、上にフライシートを被せただけなので、雪をひっきりなしに払っていかなければならない。しかしこの雪も昼頃には止み、午後はまばゆいばかりの陽光に春山のトカゲを思い出す。この日はみんなが一日増えた休養を楽しんでいた。

翌20日、全員でC1まで荷上げを行なう。昨日の雪はたった一日でほとんど消えてしまった。大嶽と増子はC2設営の為にC1に泊り、井口、那須、ワンギャル、ダルマチャンドゥはBCへ下った。翌21日、大嶽と増子はC2の設営に向う。井口から聞いていたルートはすぐに判った。氷河下部の山腹とのコンタクトラインは、わずかに山腹よりの岩屑の上を登る。ここは岩の下に氷があり、日射ですっかり岩も浮いており、うっかりそんな上に足を置こうものならこのガラガラな岩くずの斜面を落ちかねない。右にアイスフォールを見ながら登るとすぐ傾斜が落ちて中段の氷河のプラトーへつづく氷河べりを行くルートになっていた。荷上げをしながらルート表示の赤旗を立てて行く。

この谷は3,000メートルの高さでもう樹木がなくなってしまって、途中で旗用のポ

ールをもってくるのを忘れてしまったからスノーバーや梱包用のリング箱を壊してその代用とする。

そんな事をしていたのでこの日はC2 予定地まで入ることができず氷河のプラトーン上に荷をデポしてキャンプへ帰った。

翌日、2人とも調子が悪く、C1のテントを張り直すのに費す。午後、井口、那須、ダルマチャンドゥもC1入りし、5人となった。

23日は5人でC2へ荷上げしキャンプを設営する。ピークが頭上に、大クーロアールが正面によく見える台地だ。大雪田のど真中にポツンと小さなテント、という景観である。

我々井口と那須は連日の行動で少々バテたので明日はC1で休養をとることにした。しかし休養日といっても2人でテントの中で顔を見合わせていても仕方がないので測量に氷河の下の方へ出かけることにした。

広くて平らだと思っていた氷河も意外と測量をするとすると基線100メートルを見通せるところというのはなかなか無いことが判った。ときどき三脚を拡げて場所を探しているうちにとうとう氷河湖のあたりまで下ってしまった。

川の流れの向うに那須に行ってもらい200メートルの基線をとって測量を始めた。

トランシットでのぞく山はぐーっとアップになって皆すばらしい眺めだ。

一通り終わってからキャンプへ戻る。

この日上の2人は高所の影響で頭痛、下痢、吐嘔、食欲不振といった具合で、エアーマットを外へ出してひっくり返っていた由、さすがにシェルパは何んでもなかったようだが。翌日増子とダルマチャドゥはクーロアールにルートをつけるべくC2を出発した。

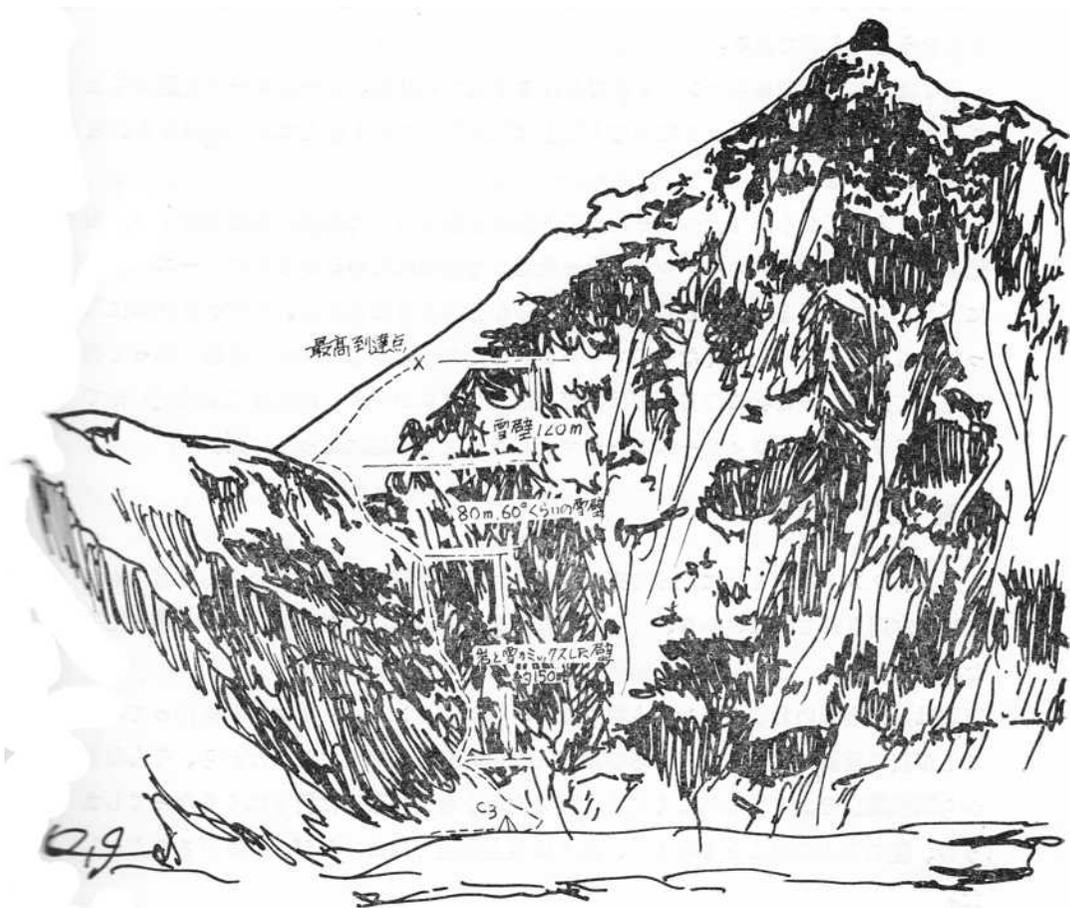
確心部は終わった

C1を出るときトランシーバーでコルへ向うことを聞いていたのだが我々がC2へ上ったら増子も、もうキャンプへもどって来ていた。ずい分早いので何か難かしいところがあって途中で帰ってきたのかと思ったら、ちゃんとコルまで上って来たのだ。

クーロアールは下部の雪のデルタが7~80mの高さまで達しているが、そこから右手のフランケに取りついたそうだ。クーロアールの真中は頭上にアイスビルディングのように懸垂氷河が青氷を見せているからとても登るわけにいかない。雪を選びながらほとんど直上、頂度いいピッチに露岩があるので支点のハーケンを打つ場所には事欠かないしよく利く。

雪の部分は丁度キックステップに手ごろな雪で、ピッチははかどり、中間部の露岩を除いて、ほとんど困難なくコル直下の雪壁を快適に直上し、約10ピッチでコルに達する。キャンプを出てから1時間半でほぼ400メートルのクローアルを上って来たが、このコルはサッカーグラウンドが2面くらい作れそうな大きなスノーフィールドだけれども以外と眺望範囲は狭い。右手には頂上への雪稜が上へ伸びている。しかし雪稜というよりも基部で300メートルくらいありそうな稜だから巨大な雪壁といった方が当たっているかも知れない。上ばかり見ていると、ずい分急に見えるが実際はそんなでもないのだろう。

下りにフィックスドロープをつけながら下る。ハーケンはロックハーケンのみ20本



近く消費。

翌 26 日シェルパを含めて 3 名でコルより上部にフィックスをつけるべく C 2 を出発、デルタの下にロープ一巻をデポし、400 メートルを上へ上げる。

コルからはダルマチャンドゥと大嶽が上ることになり、雪壁の真中から上る。単調で広い斜面だから、どこから取付いても大差はない。下部もけっこう急だが雪がくるぶしくらいまでであるが、ツアッケが利く雪だから安心して登れる。左手の青氷に支点のスノーバーを打ち込もうとダルマチャンドゥが左上したがロープが足りず、軟雪にバーをうめる。ロープの長さから 120 メートルコルから上ったことになる。

途中によいテラスなどのない急で長い単調な雪壁だが、頂上アタックにメドをつけて下ることにした。

増子、大嶽、ダルマチャンドゥは C 1 へ下り、井口、那須と C 2 を入れ換った。

我々はもう少しフィックスドロップを伸ばし、頂上をより確実にし、あわよくば頂上を狙おうという訳である。

我々は頭初計画ではキャンプ 3 まで作る予定でいたが、**クーロアル**を重荷で上るよりも、C 2 からアタックに出ても頂上は可能性ありとも思えたので結局 C 2 が最終キャンプとなった。

翌日 2 人は C 2 を出て上へ向ったものの前から続いていた那須の原因不明の呼吸困難が出て来たので、スノーデルタを上ただけで那須はこの日のうちにベースへ休養に下り、井口は C 1 まで下ることにした。しかし陽もまだ高いし、アタック体制に入ったらもう測量が出来なくなるのでキャンプの周りの雪原で 100m の基線を作って測量をしてから下った。この日下では休養。前々日にワンギャルが持って来た手紙では、今日リエゾンオフィサーのシャルマが C 1 へ来る予定になっていた。

登頂断念

夕方、ワンギャルと共に上って来たシャルマは、今我々が登っている山は直接わが隊には許可されていないから、登頂を見合わせた方が良いのではないかと、言ってきた。

彼は好人物でいわゆるインド人臭くなく、しかもインド人と国に誇りを持っていることが彼の言動ににじみ出ているのが皆んなの好意を集めていた。だから、そんな彼から直接禁止せよと言われなくても、彼の立場を考えて強引に行きにくくなってしまおうし、後の登山隊のことも考えて、我々は頂上間近ではあったが、引き下ることにした。

シャルマの話はこうだ。トランシーバーの許可が通信省から届いているかどうかケロンへ下ったときに見た地図では、C2のすぐ裏手の屋根から北側が立入禁止区域になっているというのだ。インドはそんな区域を名確に公表していないから、政府の人や軍、警察以外の人を知るはずはない。我々もそれと知らずに入って来たし、彼も地図を見て初めて知ったのだから無理もない話だ。彼はこの山に来るために地図を持って来た訳でもないのだから。

とに角、人の好い彼を困らせては、ということから我々はフィックスを回収してファプランへ転進することにした。

これは後日談だが、1952年にインドが発表したインナーラインが今もこの地域で変更されていないければ、これはインナーラインではなく、インナーラインを越える恐れのある地域から立入禁止区域であれば、インドはかなり詳細に各地域の地形を調査していることになる。

というのはこの谷の突当りのガングスタンの北側は容易に越せそうな鞍部があるからである。これを越えれば容易にいくつかの峠を越えてチェックポストを通らずにラダックの地方へ入れるからだ。

我々は当然のことながら、この国の法を遵守することにしたわけである。

28日の昼、井口、増子、ワンギャルとでフィックスを回収にC2へ上り、29日クローアルのフィックスを回収、再びC1へもどった。

シャルマは頂上まであと一息のところまで下山、というのをきのどくがってか、キャンプの際の大岩に我々の記念だと言ってマジックでなにやら大きく書いている。そして6109メートル峰に我々のパーティーの名である。Tokyo Electrical Engineering college Himalaya Expeditionの頭文字をとってTeeche(ティーチェ)ピークと名付ける、と言う、しかし我々は頂上に達していないのだから、名前は初登頂者にゆずり、後日、彼の好意を受けて未踏の谷であったこの北氷河をTeeche Glacierと名付けることにした。

9月30日、10月1日の2日間で半分も使っていない食糧、装備をベースへ下し、改めてファプランへの態勢を整えることになった。その為にダルマチャンドゥはナンガール村へ、ポーターやドンキーの手配に下って行った。